

「東北グローバル考古学—宮城の先史を再発見—」②

ハンドアックスの東と西

阿子島 香

はじめに

館長講座2回目は、旧石器時代の人類にとって非常に重要であった、ある石器を取り上げて、現生人類の登場以前のグローバルな流れの一端に触れてみたいと思います。現生人類とは、私たち新人のことで、ホモ・サピエンスと同義です。今日ご紹介する石器は、ハンドアックスと総称されますが、大形の両面加工石器です。当館の常設展示にも、総合展示室に入ってすぐのところに、韓国のカウォリ（佳月里）遺跡、中国の丁村遺跡の例が展示されています。原人段階の祖先たちは、ハンドアックスなどを携えて、アフリカから出て、ユーラシアに広く拡散しました。

人類の起源と石器の始まり

人類の祖先が地球上に現れたのはアフリカで、およそ700万年前とされています。初期猿人として分類される最古のサヘラントロプス・チャデンシス（名はトゥーマイ）から、アルディピテクス・ラミダスなどが生息していました。

次いで猿人に分類される、アウストラロピテクス・アフアレンシスなど数種類への進化が起きて、次第にヒトとしての特徴が出てきます。約360万年前に残された足跡があり、3個体が歩いた形跡が、タンザニアのラエトリで発掘されています。直立二足歩行が、石器の製作よりもずっと早くに始まったのです。余談ですが私も、高齢者の仲間入りをすることになって、気になる折込み広告などで「足から衰える」と見出しをみるにつけ、ヒトの本質は直立二足歩行からだ、改めて思うことです。アフアレンシスには、ルーシーという名の女性化石があり、発見時に流れていたビートルズの音楽から名前がつけました。

その後、絶滅した猿人の種類もありましたが、初期の原人ホモ・ハビリス、そしてアフリカを出てユーラシアに広く進出した原人、ホモ・エレクトスのように進化の道をたどりました。人類最古の確実な石器はエチオピアで発掘され、約250万年前とされています。自然石のへりを打ち欠いて刃部をつけた石器である、チョパーなどが登場します。ルイス、メアリー、リチャードのリーキーファミリーの活躍で知られるタンザニアのオールドヴァイ渓谷遺跡群を標識とする、オールドワン文化に見られる石器群の特徴が既に現れています。猿人からホモ・ハビリスに進化する頃に、人類は石を加工して道具として使用し始めたのでした。

アウト・オブ・アフリカと原人

アフリカでは、約 180 万年前にホモ・エレクトスが登場して、脚が長いプロポーション、750~1000 cc に達する脳容積、小さな歯と顎という、より「ヒトらしくなった」祖先たち、原人は、本格的な石器を製作するようになりました。今回講座タイトルのハンドアクスは、左右対称に近く、表と裏の両面加工を行い、尖った形を作り出し、原人と共にあった代表的な石器と言えます。ずっしりとした、いわば万能な石器を携えて、原人はユーラシアに拡散していきました。なお、約 180 万年前という早い時期に、アフリカから出た初期原人の波があったことが、黒海に近いジョージア共和国のドマニシ遺跡群の発見で明らかになり、1990 年代に学界に衝撃を与えました。しかし石器はまだオールドワン文化の特徴を残していました。

猿人も、原人も、そして新人も、まずアフリカにおいて進化が起きたというのは、なぜなのか、人類史の大きな論点です。多くの考え方がありますが、森林からサバンナなどの環境条件と、肉食獣なども多く生息している中での厳しい生存など、生態学的な状況を前提に考えていくべきでしょう。猿人は、肉食獣が食べ残した死骸をあさっていた「スクャベンジャー」という存在で、狩猟を行うようになったのは原人段階を待たなければならなかったとも考えられています。

ハンドアクスの進化

ハンドアクスの最古級の事例を紹介します。エチオピアのコンソ遺跡群からの出土品で、東北大学の佐野勝宏教授（東北アジア研究センター）がこの地域の調査に関わっています。最初期のハンドアクスは、なんと 175 万年前にさかのぼり、原人の出現とほぼ同年代になります。先が尖ったピックや、刃部が直線的なクリーバーなどもあります。粗雑な両面加工の石器は、次第に精巧に製作されるようになって、80 万年前には、左右対称、表裏対称に入念な調整加工が施されるようになりました。ハンドアクスの文化的進化が、地層と共にとらえられる貴重な業績です。

ハンドアクスは、アシュール文化と総称される前期旧石器（下部旧石器）文化の指標となっていて、アフリカ、ヨーロッパ、インドなどへ、その後の原人の拡散に伴って広がっていきました。人類の文化面での進化と広域への適応放散を象徴するような存在といっても、過言ではないかもしれません。ヨーロッパでのハンドアクスは、フランス北部のソナム川の礫層から最初に発見され、サン・タシュールの地名が標識となり、世界的に使われる文化名となりました。

ハンドアクスを主要な石器とする文化の広がりには、アフリカ、ヨーロッパ、西アジア、インドなど広大な地域に及びますが、イギリスや東欧にはむしろ剥片石器を主にする文化（クラクトン文化など）もあり、地域性が認められます。またヨーロッパではアシュール文化は、20 万年位前から次第にムスチエ文化に移行します。ムスチエ文化は、基本的に旧

人（ネアンデルタール人）が残した文化ですが、一部に両面加工石器が残っている「アシュール系ムスチエ文化」という細別文化類型もあります。

そして、1970年代までの世界の定説としては、東アジア、東南アジア、北アジアなどは、大きく別の文化圏を構成していて、チョパー・チョピングツールを主とすると考えられていました。アメリカのモヴィウス氏が提唱したので、ハンドアクスが分布する東限界を「モヴィウスライン」と称していました。有名な北京原人の遺跡、周口店洞窟（46万年～23万年前）でも、石器はチョパーや小型スクレイパーなどを主体としています。北京原人の遺跡では、人類が火を使用していた明確な証拠の灰層も検出されています。

韓国・全谷里での衝撃的発見

ところが、1978年に韓国で驚くべき発見がありました。ソウル北方の全谷里で、ハンドアクスが採集されて、金元龍（キム・ウンヨン）氏主導により79年以降の発掘調査で多くの両面加工石器が出土したのです。東アジアにもアシュール文化が波及していたかという、現在まで続く国際的な議論の発端でした。韓国では、その後の発掘調査で、ほぼ全国的に両面加工石器を伴う文化が認められています。国立中央博物館館長の裴基同（ペ・キドン）氏は、全谷里の遺跡名を標識に「チョンゴニアン文化」と総称して、アシュール文化との比較を進めています。全谷里のハンドアクスは、35万年前にさかのぼる古さを持つとされます。遺跡文化層の基盤にある玄武岩層の立地、自然科学的年代測定による編年ですが、もっと新しいと推定する異論もあります。

全谷里が立地する地域は、「イムジン河」という歌でも知られる南北分断の場所で、非武装地帯（DMZ）も近いところです。最初のハンドアクス発見者が、米軍人だったという学史も、時代背景の中で考察されるでしょう。現在は大都会ソウルの郊外になって、韓国でも5月の、端午の節句の連休には、数十万人が集まる「旧石器まつり」が大イベントです。2011年には広大な国史跡公園の一角に、超モダンな建築の「全谷先史博物館」がオープンし、人類史を学ぶ場所になっています。

中国でも、南部の百色遺跡群など、ハンドアクスは各地で発見されています。「手斧」と呼ばれます。韓国の出土例でも特徴的なことですが、東アジア一帯のハンドアクスは、先端部分の加工が入念で、先が尖る形が目立ちます。一方で、握る部分になる基部周辺は、加工が粗く、あるいは自然石の面を残して丸さを持つ事例も多くあります。しかし、ずっしりとした大型の石核石器であり、両面加工石器は形態にも多様性が認められ、先端の尖りが鋭いピック、刃部が直線的なクリーバー、楕円形石器など各種があります。

日本列島への人類の渡来については、次回館長講座で取り上げる予定ですが、大分県早水台（そうずだい）遺跡は、後期旧石器時代をさかのぼる遺跡のひとつです。1964年に芹沢長介先生が発掘して、日本前期旧石器時代を提唱しました。2001年、2002年に芹沢名誉教授の指導のもと、東北大学考古学研究室が再発掘調査を実施し、多数の石器を出土しました。ご紹介するハンドアクスは、今回解説したような、東アジア的特徴がよく表れてい

る事例です。日本列島の石器時代は、東アジアの中で考えていく必要があることを、よく示しています。

ネアンデルタール人の石器

フランス南西部は、旧石器時代の研究がいち早く進められた地域です。1875年にはラルテとクリスティによる本格的な研究書『アクイタニアの遺物』が刊行されました（東北大学梅原文庫）。レ・ゼジー村周辺は、ラスコー洞窟をはじめ重要な遺跡が密集しています。レ・ゼジーの国立先史学博物館は、フランスでも重要な旧石器時代の総合博物館です。21世紀に新築リニューアルした博物館展示から、ハンドアックスの時代を考えてみます。

アシュール文化から、ミコック文化、ムスチエ文化への変遷を、壁面に貼り付けた石器展示で見ることができます。ジオラマで復元されたネアンデルタール人の姿は、北方への寒冷地適応という進化の道をたどった旧人という理解をうながします。彼らが発達させた石器製作技術に注目してみます。ルヴァロワ技法といって、亀の甲羅のような形の石核を両面調整し、最後に目的とする剥片をはがします（ルヴァロワ剥片）。ネアンデルタール人は、このように数段階の工程を踏んだ石器製作技術を持っていました。しかし、新人（クロマニオン人）のように、石刃を多数、連続して剥離製作することは、ありませんでした。

ムスチエ文化の代表的な遺跡に、レ・ゼジーにも近いコンブ・グルナル洞窟があります。20世紀後半の旧石器研究をリードした一人であるフランソワ・ボルド氏が発掘調査しました。洞窟の断面模式図でもわかりますように、ここではムスチエ文化の各細別類型が出土しています。しかし、ハンドアックスを伴う「アシュール系ムスチエ文化」が、下層にあるというわけではありません。ボルド氏は、さまざまなムスチエ文化は、人間集団の違いを反映していると考えました。この解釈に対して、前回講座でご紹介しましたアメリカのビンフォード氏は、統計学的な分析を根拠として、ネアンデルタール人が行なった種々の人間活動の違いが反映されていると解釈して、考古学研究史上でも重要な論争「ムスチエ文化論争」に発展しました。

おわりに

以上、ごく概略的に原人文化の代表的な石器、ハンドアックスを焦点に考えてみましたが、初めて聞くと非常に複雑に思えてしまいます。200万年以上の石器時代人類史を考えるには、相当な簡略化が必要なわけですが、それでも多くの重要課題に触れることができず、今後の機会に譲りたいと思います。中国北部の最古級の石器群として、河北省泥河湾盆地の100万年前を優に越える遺跡群、インドネシア東部のフローレス島で発見された超小型人類（ジャワ原人の子孫か）、東アジアにおける前期・中期旧石器から後期旧石器への石器群の連続性（韓国など）、ヨーロッパのムスチエ文化の内容と旧人文化の実態、ユーラシア東端の日本列島への人類渡来など、国際的にも多くの課題が論じられています。どの問題を取り上げた場合にも改めて考えを深めるのは、いかに人類の歴史は複雑であったのか、そして多

様な道筋をたどってきたのだろうかという認識です。

参考文献

阿子島香（2015）「氷河時代の人類生活を探る」 阿子島香編『北の原始時代』第1章。吉川弘文館。

諏訪元、ヨナス・ベイェネ、佐野勝宏、ブルハニ・アスファオ（2017）『アシュール石器文化の草創—エチオピア、コンソ』東京大学出版会。

馬場悠男（2015）『私たちはどこから来たのか—人類700万年史』。NHK出版。

柳田俊雄、小野章太郎（2007）「大分県早水台遺跡第6・7次発掘調査の研究報告」*Bulletin of the Tohoku University Museum, No.7*.（東北大学附属図書館サイトから、無料ダウンロードできます）。